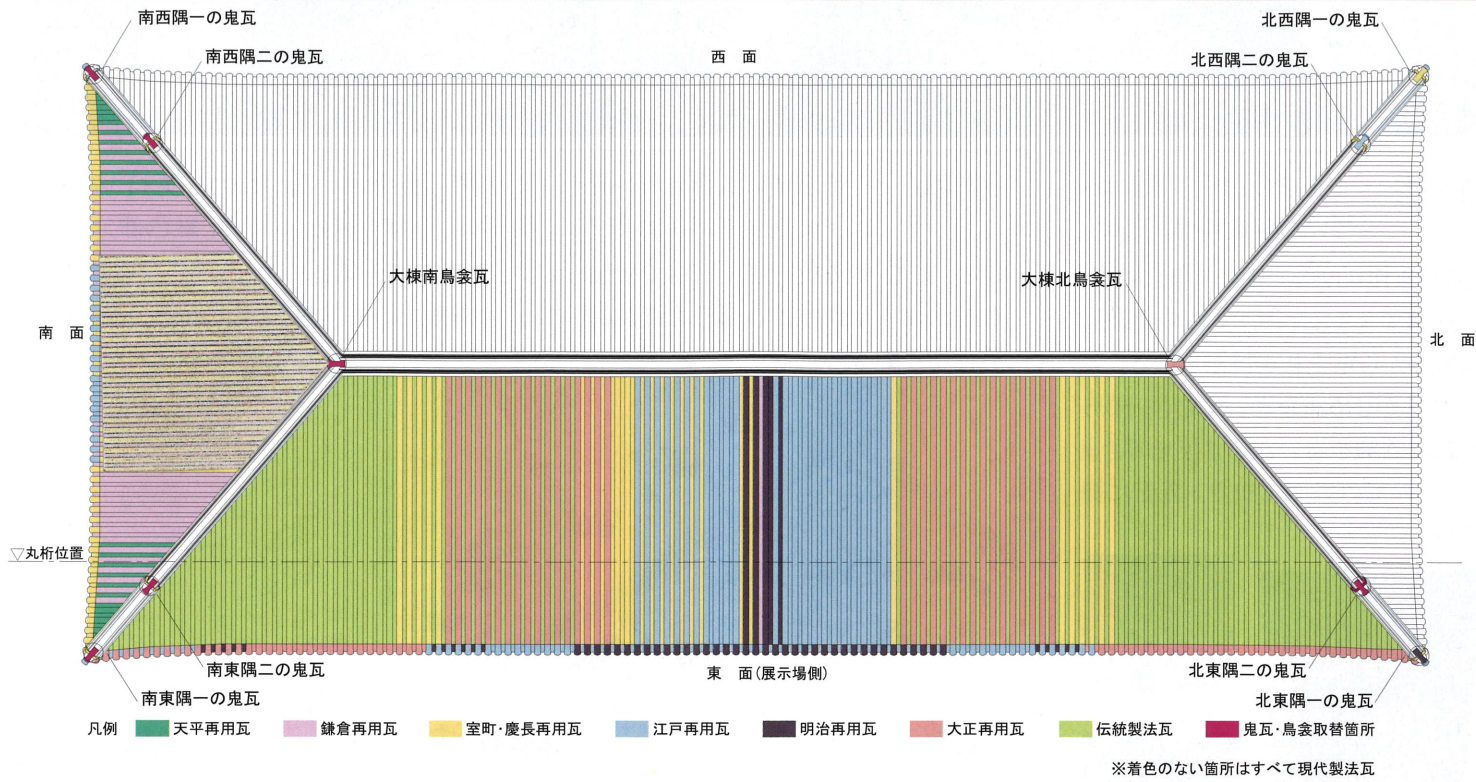


■ 正倉屋根の配置について



■ 正倉工事について

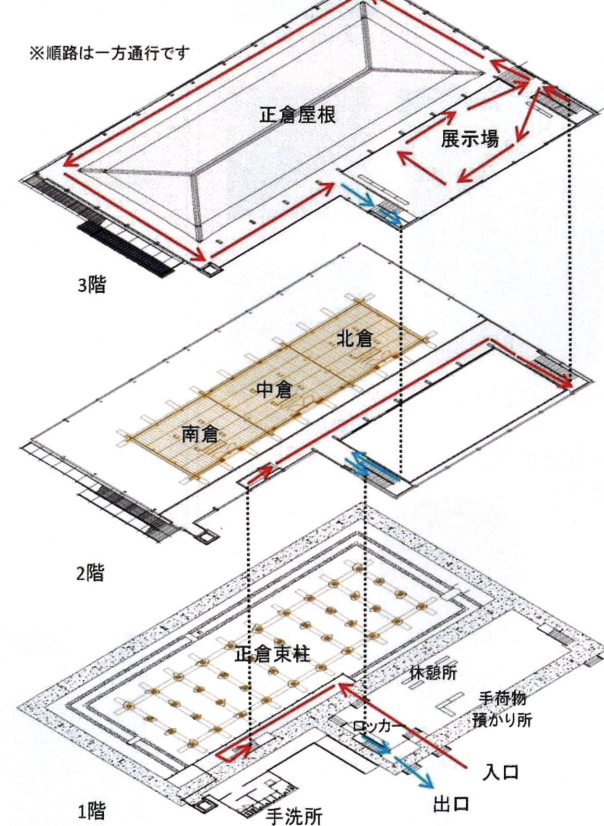
正倉の屋根葺き替えが平成25年11月に無事終了しました。今回、大正2年に実施された解体修理から約100年を経過し、傷みが徐々に進行して雨漏りが懸念される状態となったことから、平成23年度より屋根の葺き替えを主とする整備工事を行ってきました。

この工事は、100年後に行われるであろう大規模修理に向けて、正倉という建物を保存継承していくことが目的の工事でもあり、一定の成果が得られたものと確信しています。また、限定的ではありましたが、工事中の正倉を間近でご覧いただけたことも大きな成果だと思っております。

今後は、4月から素屋根の解体を行い、10月に本工事の終了を迎えます。

平成23年	10月	素屋根建設開始(～24年2月下旬まで)
平成24年	3月	第1回現場公開
	4月	正倉本体の工事開始 屋根工事 瓦撤去、選別・清掃、土居葺一部撤去 補足瓦試作・検討
	9月	第2回現場公開 小屋組構造補強工事(～25年4月まで) 敷桁受材取付、小屋組補強金物取付
平成25年	12月	補足瓦製作開始
	1月	屋根工事 土居葺復旧(～5月まで)
平成26年	3月	第3回現場公開
	6月	屋根工事 瓦葺き(～11月まで)
	8月	第4回現場公開
平成26年	1月	内部復旧
	2月	第5回現場公開 正倉本体の工事終了
	4月	素屋根解体、周辺復旧
	11月	正倉外構公開再開(予定)

案内図



守っていただきたいこと

- **触らないで** 正倉に触れるのはご遠慮ください。
- **写真撮影** 建造物や展示品は撮影できます。ただし三脚の使用はご遠慮ください。
- **飲食・喫煙** 敷地内での飲食・喫煙はご遠慮ください。

<これまでの工事の様子等は宮内庁HPでもご覧いただけます。>
<http://www.kunaicho.go.jp/event/shososeibi/>

正倉院正倉整備工事 第5回現場公開



開催日 平成26年2月7日～11日
 主催者 宮内庁京都事務所
 宮内庁正倉院事務所
<http://www.kunaicho.go.jp/>

■ 正倉とは

正倉院正倉は、奈良時代創建の東大寺の倉庫のうちの一つであり、北倉、中倉、南倉の三倉が集合する一棟三倉形式の建造物です。創建年代を直接示す記録はありませんが、ほぼ天平勝宝8歳(756)頃には成立していたと考えられます。天平勝宝8歳は聖武天皇が崩御された年で、その七七忌にあたる6月21日に光明皇后が聖武天皇のゆかりの品々を東大寺大仏に献納し、正倉院宝物の始まりとなりました。

北倉は聖武天皇御遺愛品が納まり、当初から開扉に勅許を要する倉、すなわち勅封倉でした。また、中倉も平安時代中頃までには勅封倉になっています。南倉のみは長らく僧綱(のち東大寺三綱)が管理する倉、すなわち綱封倉でしたが、明治8年(1875)に正倉および正倉院宝物が政府の管理下に置かれるに至り、三倉とも勅封倉となりました。

戦後、新しく近代的な宝庫が完成したことをうけて、正倉にあった宝物は、昭和35年(1960)までに、一部の唐櫃を除いて全て取り出されました。現在は、空調設備のある西宝庫(昭和37年竣工)、東宝庫(昭和28年竣工)が宝物の収納・保存の役割を担っています。その後、平成9年(1997)には国宝に指定され、さらに翌年には「古都奈良の文化財」として世界遺産に登録されています。



工事前外観



新規製作した北東二の鬼瓦

瓦刻印



鎌倉時代

室町時代



江戸時代(慶長)

江戸時代(元禄)

瓦 正倉の屋根は35,432枚もの瓦で葺かれていました。特筆すべきは奈良時代の瓦が平瓦で738枚、丸瓦で105本残っていたことです。残念ながら奈良時代の軒平瓦及び軒丸瓦はありませんでした。その他、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代(慶長、元禄、天保)、明治時代そして大正時代の瓦が確認できました。

屋根から降ろした瓦は、再び使用することが可能かどうか、一枚ずつ慎重に目視並びに打音検査を行い確認しました。古い瓦を可能な限り再使用したいという思いと、今後100年は雨漏りを生じさせないという思いからです。その結果再び屋根に戻すことができた奈良時代の平瓦は259枚、丸瓦は20本でした。また、修理後の瓦総数34,621枚の内、8,426枚の古い瓦が再使用できました。

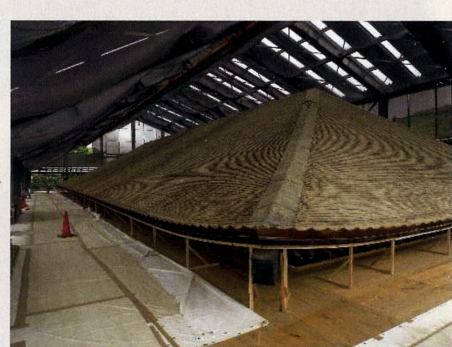
今回再用了奈良時代の瓦は南面に使用しました。南面が最も環境がよいためです。また残りの古瓦についても南面あるいは東面中央部分に使用し、西面並びに北面は新規補足瓦を使用しました。さらに葺き方も古瓦で葺いた南面と東面(軒先を除く)は、土葺きにし、新規補足瓦で葺いた西面と北面は空葺きにしています。



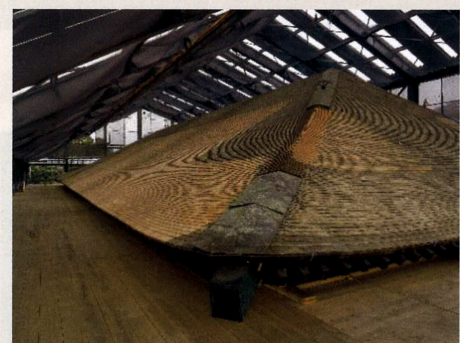
①工事前屋根の状況(H24.4)



②丸瓦撤去後の状況(H24.5)



③瓦・葺土・土留棧撤去後の状況(H24.6)



④土居葺を葺替えた状況(H25.2)



⑤下地棧取付け(H25.6)



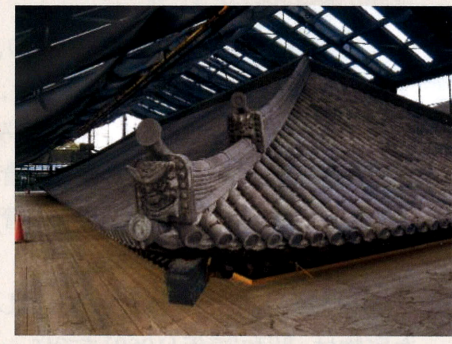
⑥軒平瓦の取付け後(H25.7)



⑦平瓦が葺かれた状況(H25.8)

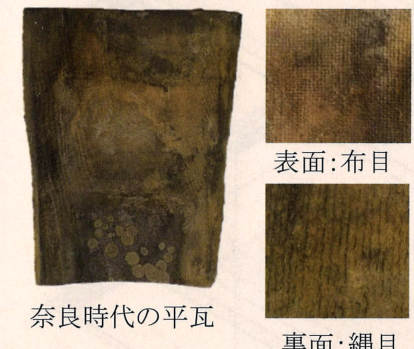
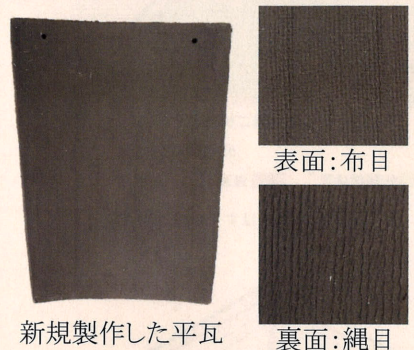


⑧丸瓦が葺かれた状況(H25.10)



⑨屋根瓦葺きが完了した状況(H25.11)

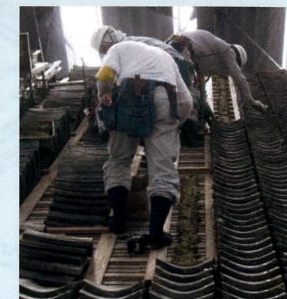
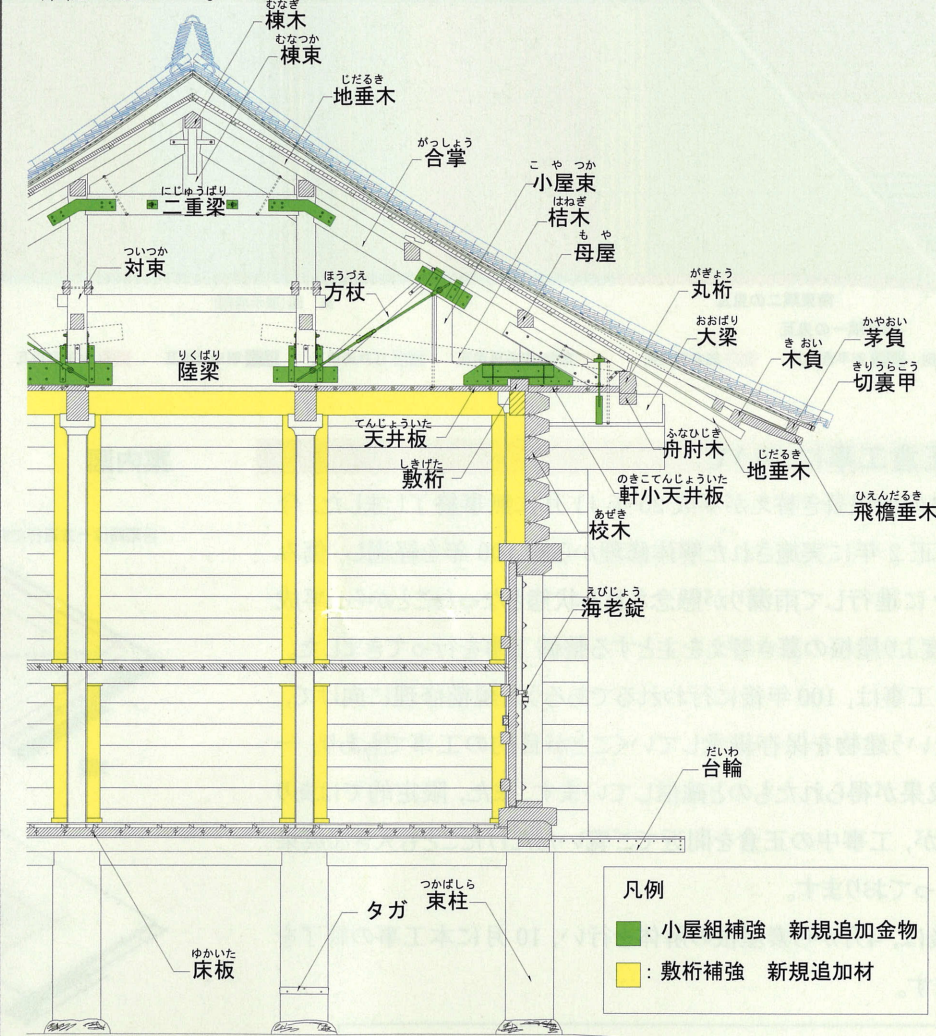
製法 正倉の屋根に葺かれていた奈良時代の瓦は、「桶巻き作り」と「一枚作り」の2種類が確認できました。いずれの方法も成型台から粘土板をはがしやすいようにあらかじめ布を巻いておき、成形の際には縄を巻いた叩き板で叩きます。そのため表面に布目、裏面に縄目がつきます。



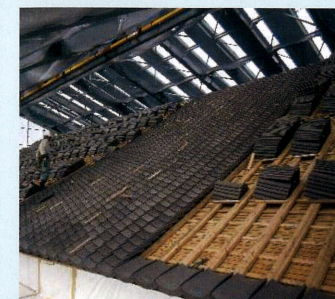
成形方法の違い
成型台



構造 修理前の正倉は軒の垂れ下がりが懸念されていたので、丸桁が現状以上に垂れ下がらないように、小屋組を鋼材で補強し(下図、緑色部分)、また、支点となる敷桁部を木材で補強しました(下図、黄色部分)。これらにより、これ以上垂れ下がりが進まないよう対策が講じられ、修理後の計測結果からも補強の効果が確認できました。



土葺き工法



空葺き工法

工法 土葺きは瓦の下に土を置いて瓦を固定する、従来の葺き方です。瓦に穴を開けません。空葺きは、土を使用せず、木下地に釘で留めつける葺き方です。土がない分屋根を軽くできます。



江戸時代(天保)

明治時代



大正時代

今回工事